第71巻 第12号 通巻953号　2019年9月20日発行・発売［毎月1回20日発行・発売］
1949年12月24日第3種郵便物承認　ISSN0022-8362

10
OCTOBER 2019
Volume 71 / Number 12

日本看護協会
機関誌
JOURNAL OF THE JAPANESE
NURSING ASSOCIATION

看護

特集1

地域で活躍 専門性の高い看護師
個別指導から体制整備まで

特集2

“あと一歩”エピソードから学ぶ
生活の視点を持った在宅移行支援

生きるを、ともに、つくる。
公益社団法人 日本看護協会

一般社団法人だんだん会が取り組む４つの事業。左上／地域看護センターあんあん（訪問看護）、右上／定期巡回てくてく24（定期巡回・随時対応型訪問介護看護：一体型）、左下／グループホームわいわい白州、右下／わがままハウス山吹（多機能型シェアハウス）

看護の力で地域を守る

移住ナースと地元ナースの協働で新たな事業を展開

一般社団法人だんだん会（山梨県北杜市）

住みたい田舎として人気が高く移住者が多い山梨県北杜市。そこに、東京で在宅ケアや認知症グループホームの運営に40年近くかかわってきた宮崎和加子さんが移住。北杜市の医療・看護・介護の充実のために、ナースに何ができるか ── 新たな挑戦が始まった。

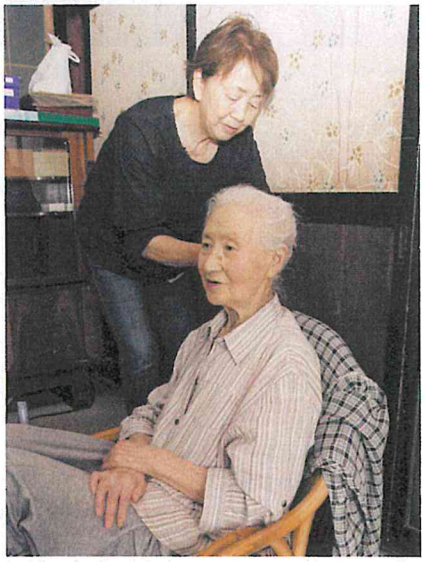
【取材先】
・一般社団法人だんだん会 長坂事務所
山梨県北杜市長坂町夏秋918-5　電話0551-45-9566
・地域看護センターあんあん
同上　電話0551-30-7505
・定期巡回てくてく24
同上　電話0551-30-7787
・グループホームわいわい白州
山梨県北杜市白州町白須1023　電話0551-30-7566
・わがままハウス山吹
山梨県北杜市小淵沢町10123-2　電話0551-45-6323

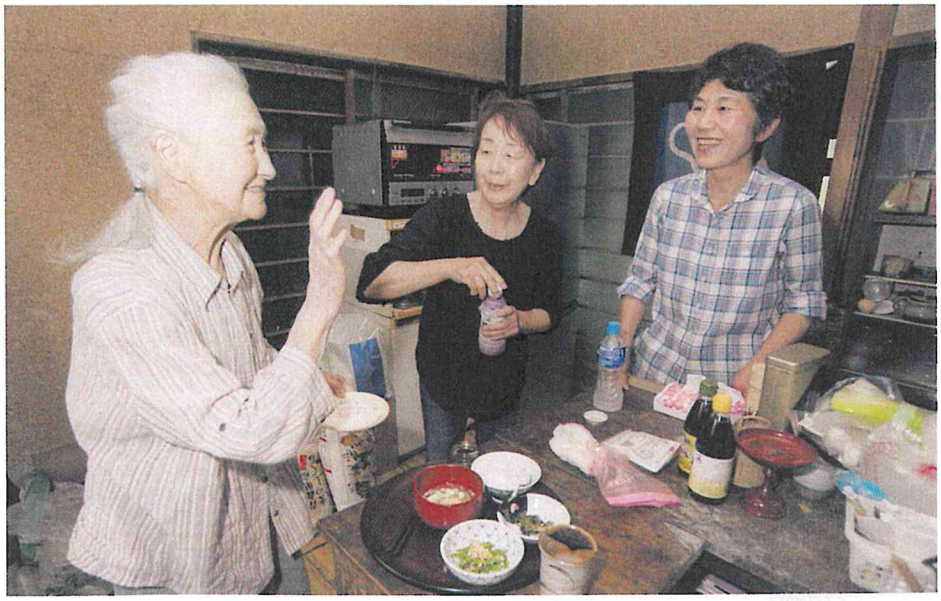
一般社団法人だんだん会 長坂事務所の外観。ここに地域看護センターあんあん、定期巡回てくてく24の事務所もある

地域看護センターあんあん（訪問看護）&
定期巡回てくてく24（定期巡回・随時対応型訪問介護看護：一体型）

地域看護センターあんあん所長の浅見玲子さん。週5日褥瘡処置等を実施している利用者への訪問看護。介護家族は「“あんあん”さんが親切・丁寧に対応してくれるので安心です」と言い、褥瘡が治り、尿道カテーテルが外れて行動範囲が広がり、車いすで外出できるようになることを心待ちにしている。“あんあん”の利用者は月平均50名。2018年度の看取りは33件。常勤職員4名、非常勤1名

定期巡回てくてく24所長の西室徳子さん。認知症を持つ写真の利用者は、365日1日2回の訪問を受け自宅で1人暮らしを続けている。前日からの引き継ぎで、なくなっていた牛乳を西室さんが途中で購入して訪問。毎日複数回の訪問で信頼関係を築き、人を寄せ付けない方だったが「私のためにまごころを込めて接してくれているのがわかるようになった」と言う





上／続いて、“てくてく”介護職の渡辺斗子さんが訪問しているもう1人の利用者のお宅にお邪魔した。発熱して体調を崩していたが、早期発見・対応により持ち直していた。左／一緒に食事の準備をしているときに、認知症の利用者が「どうしてこんなになってしまったんだろう」と体調不良をいぶかると、渡辺さん、西室さんから「1時間も草取りをしたからよ」とつっこみが。こんなやりとりができるのも、365日1日2回訪問し、日常を把握しているからだ。“てくてく”の7月の利用者は13名、常勤職員4名、非常勤7名。わがままハウス山吹にも訪問している

グループホームわいわい白州

グループホームわいわい白州は、2つのユニット「尾白」と「摩利支天」から成る。1ユニット9名×2で計18名の定員。2019年7月現在は満室。常勤職員11名、非常勤4名。上左／「尾白」のリビングでくつろぐ入居者。上右／「尾白」スタッフの介護職・湯舟康弘さん（写真左）と看護職・海野恵美さん（同右）。中央は入居者

上左／「摩利支天」のユニット長（介護職）・近藤浩さん（写真右）と介護職・清水恵子さん（同左）。中央は入居者
上右／ドラッグストアで買い物をする入居者と付き添いの介護職・大柴弘美さん
左／午前10時40分、「摩利支天」のリビングで、くつろぐ入居者。食事の時間などスケジュールは決まっていないため、まだ食事中の入居者も。のびのび、ゆったりと、自分らしくがコンセプト

グループホームわいわい白州の外観。左が「尾白」、右が「摩利支天」

わがままハウス山吹（多機能型シェアハウス）

取材当日は6人の入居者中5人がそろって夕食に。食事はいつどこで食べても自由。外食の場合もある。ここは、なんの制約もなく、自由にわがままに暮らすことができる家。超高齢者、要介護者、終末期の方が長期でも短期でも入居でき、安心してともに過ごせるシェアハウス。住民主体型サロンも開催している

上／短期入居の方（写真左）と談笑する宮崎さん。
左／きよさと診療所の医師・福冨みずほさんが入居者へ往診。医療・看護・介護が必要となった場合は外部のサービスを利用する。福冨さんとは“あんあん”や“てくてく”でも連携している

左／わがままハウス山吹外観。国土交通省スマートウェルネス住宅等推進モデル事業で費用の補助を受けて空きペンションを改修
右／寄り添いスタッフの池永博子さん（写真左）と石川由美子さん。ケアマネジャーの経験がある石川さんは“山吹”に施設のような決まりがないことに最初は戸惑ったという。入居者をどう支えていくかを皆で話し合いながら決めていくうちに「もっと自由でいい」と気づき、「新しいことにチャレンジしていきたい」と目を輝かせた

移住ナースと地元ナースの出会い

2013年、一般社団法人全国訪問看護事業協会事務局長だった宮崎和加子さんは、還暦後は豊かな自然に囲まれて暮らしたいと、山梨県北杜市への移住を決めた。退職が目前に迫った2015年の夏には、60歳で東京での活動に終止符を打ち「北杜市で地域の人々が自分らしく暮らし最期を迎えるために不足している介護関連サービスをつくっていこう」と決意。事業立ち上げの相談のために北杜市役所に足を運んだ。そこで、当時介護支援課課長だった保健師の中嶋登美子さんと出会う。

宮崎さんは中嶋さんに自分の夢を語った。

「たくましく力量のあるプロの看護職と介護職の集団で地域包括ケアの中核を担い、健康なときから住民にかかわり、重度になっても地域で暮らせるようにしていきたい」。

中嶋さんにもかねてから「地域で看護の力を発揮して、住民や医療関係者にその独自性を認めてもらいたい」という思いがあった。「宮崎さんとならそれが実現できるかもしれない」と期待に胸が膨らんだ。

一般社団法人だんだん会理事長・宮崎和加子さん

2015年の秋、北杜市で認知症グループホーム運営の公募があると知り、法人を立ち上げ、手上げすることに。

2016年1月19日、宮崎さんが理事長となって一般社団法人だんだん会（以下：同会）を設立。同年3月末に、自立支援中心を謳った認知症グループホームが公募で選出された。

宮崎さんは2016年4月から北杜市で本格的に移住生活を開始。同時期に中嶋さんも北杜市役所を定年退職し、同会の理事となった。

こうして移住ナースと地元ナースが一緒になって次々と地域の医療・看護・介護を担う新たな事業を展開していくベースができた。

さらなる出会いと展開

2016年10月、宮崎さんは中嶋さんの紹介で訪問看護ステーションの立ち上げに悩んでいた地元ナースの西室徳子さんと出会った。西室さんの「思い切り訪問看護をしたい」という気持ちを受け止め、同会の事業として2017年2月に地域看護センターあんあん（以下：“あんあん”）を開設。

“あんあん”立ち上げ前の2017年冬には、北杜市による定期巡回・随時対応型訪問介護看護事業の公募があり、宮崎さんはこれまでの経験から「このサービスが地域包括ケアのカギになる」と考え、これも手上げし、選出された。在宅での看取りも視野に入れ、そのためには看護職が中心となって取り組む必要があると〈看護強化タイプ〉と銘打ち定期巡回てくてく24（以下：“てくてく”）のサービスを2017年10月に開始し、西室さんが所長となった。

西室さんは「介護職と連携して頻回に利用者とかかわることで、重症化を予防することができ、利用者が好きな自宅で暮らし続けることを支えていけるのが楽しい」と話してくれた。

近隣の地域の病院で看護部長をしていた浅見玲子さんも仲間に加わり、のちに“あんあん”の所長となった。「これからの訪問看護師は訪問するだけでなく、地域看護師として活動の場を広げ、多職種と連携し地域を包括的に見ていく意識を持つ必要がある」という宮崎さんの考えに魅せられたという。

“てくてく”と“あんあん”が協働して訪問していたALSの利用者がいた。食事・排泄などの生活支援は“てくてく”が、医療的ケアは“あんあん”が実施。“てくてく”の職員は1日何度でも、利用者がベルを鳴らせば訪問する。それがALS利用者の安心につながっていた。

最期が近づいてきたときには、“あんあん”の看護が支えた。訪問看護

同会理事・中嶋登美子さん

オレンジサロンわいわい白州

中嶋さんが声かけした市民ボランティアの協力により実施している「認知症カフェ」。参加者は、認知症の人とその家族、認知症を予防したい・理解したいと思っている人など、毎回15名ほど。グループホームわいわい白州２階地域交流スペースで月２回の開催のほか、だんだん会長坂事務所でも月２回開催。朝日新聞厚生文化事業団からの助成金100万円（初期費用と3年間の運営費）を活用している。中嶋さんは「認知症の人が地域で自分らしく暮らしていくために、市民が自分ごととして受け止められるように、この取り組みをもっと地域に広めていきたい」と話してくれた

師は人がどのように亡くなっていくのか少しずつ介護家族に伝えていく。このALSの利用者も介護家族が1人で最期の呼吸停止を確認することができた。連絡を受け訪問した医師や看護師とともに看取りを終えた後、亡くなられた方が好きだったコーヒーを皆で飲んでお別れをした。

浅見さんは「死に方は残された人のためにある。よいお看取りができてよかったと思えることが大切」と言う。

市民参加でできた多機能型シェアハウス

移住者が多い北杜市には、移住者同士が交流を深めるためのさまざまな活動を行うコミュニティがある。そこで、どうしたら最期まで自分らしくこの地域で暮らせるか話し合いを重ねていた5人の仲間（八ヶ岳根っこの会、以下：根っこの会）がいた。1人暮らしの高齢者が集う場所や、ホームホスピスをつくりたいとの思いを持っていたがなかなか実現に至らなかった。

2017年秋、根っこの会とだんだん会が出会ったことで、その思いが「わがままハウス山吹」（多機能型シェアハウス、以下：“山吹”）として実現した。

“山吹”には、住民主体型サロン「わたしの茶の間」の開催、1人暮らしが不安な高齢者や重度者が入居する「見守り付きハウス」、看取りを行う「別荘ホスピス」の３つの機能がある。食事をつくるなどの生活支援をしながら入居者を見守る“寄り添いスタッフ”が8時～20時まで常駐している。亡くなるまでの長期の入居でも、1日だけの短期でも利用可能だ。根っこの会のメンバーは寄り添いスタッフとして働いている。

近くでペンションを経営していた長期の入居者は家族を亡くし1人暮らしだった。「ここではなんでも自分で好きなようにできるし、みんなとおしゃべりできて1日があっという間」と話してくれた。

＊

だんだん会ではさまざまな事業を看護・介護が一体となって、質と量を確保しながらサービスを提供している。これは人口およそ4万7000人の北杜市のような規模の地域で行う新たなケアモデルとなるのではないかと宮崎さんは教えてくれた。

撮影：坂元永　文責：阿部真里子（編集部）

だんだん会 長坂事務所周辺の眺め